※文字の大きさは MS ゴシック ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No. 60

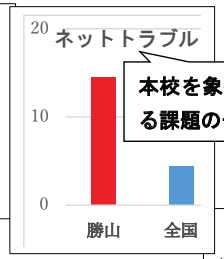
【様式２】

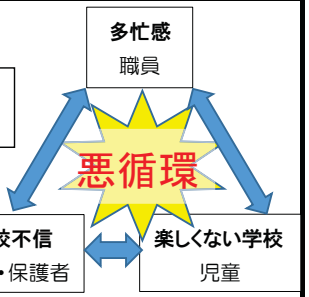
エントリー名：真庭市立勝山小学校

学校名：真庭市立勝山小学校

活動名：コロナ禍を逆手に変心、変身、変新
～教育課程の工夫と人の繋がりで、働き方改革～

解決すべき課題：学校と地域・保護者との連携のまずさから生徒指導上の課題解決に忙殺される。職員は超過勤務で疲弊し児童は不登校が多く学力や体力に大きな課題があった。コロナ禍でさらに課題が大きくなる危険性があった。





▲超過勤務の常態化でゆとりがない
▲児童の生活意欲が低く、知・徳・体すべてに大きな課題
▲学校と地域・保護者との連携がまずく学校への信頼なし

目標：**職員の超過勤務が減り、ゆとりができる　➡教師の本来業務に専念　➡児童の生活意欲が高まる（学校が楽しい）➡保護者や地域の信頼をうむ　➡職員の働きがいにつながる**･･･好循環
方針：**客観データを活用し、職員・地域・保護者それぞれの意識改革を進める。学校課題と解決策を示し、学校経営への理解と協力を得て負の連鎖を断ち切る。**

① 職員の意識改革･･･教師は真面目で忍耐強く善意で行動する。それが結果的に超過勤務の常態化につながっている。平均的数値や法律を示し、オーバーワークを戒めた。
② 地域・保護者の意識改革・連携･･･要望すれば学校は何でもしてくれるという意識が強い。学校・地域・保護者の役割を再確認し、「協働して子どもを育てる」という自覚を促した。それぞれの「すべきこと」を確認し学校が「できること」と「できないこと」をはっきりと伝えた。

活動内容：**「働き方改革」「学校・地域・保護者との連携」に対する意識改革の推進**　**変心！！**

① 職員の意識改革の推進　**あなたの人生の評価者は校長ではなく、あなたの家族**

▲余裕時数 100 時間超え。善意で編成した教育課程が教師自身の首を絞める ➡ ■教育課程の見直し　100 時間超…やり過ぎ？

▲勤務時間は 7 時間 45 分なのに 6 年生の滞校時間が 8 時間 10 分 ➡ ■日課表の見直し　全国 10 校の日課表から 6 年生の平均滞校時間は 7 時間 20 分 8 時間 10 分は異常では？

▲仕事のゴールが不明確で善意と使命感だけで学校が動く ➡
■人がすること　PC にさせることの仕分け
■PC による出退勤管理の徹底
■ICT 活用（GIGA スクール構想に対応した授業改善、協働学習ソフト、職員間の情報共有欠席連絡、コロナ対応）をクラウド化

② 地域・保護者の意識改革・連携推進
私のためにすることが人のためになる幸せ

▲学校と保護者・地域双方向の意見交流の場がないネットトラブル等、生徒指導の難しさにつながる ➡
■学校状況説明会の開催（年 3 回）
■23 年ぶりの地区懇談会開催

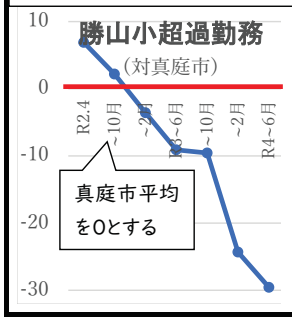
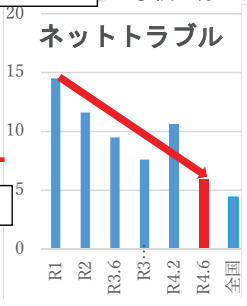
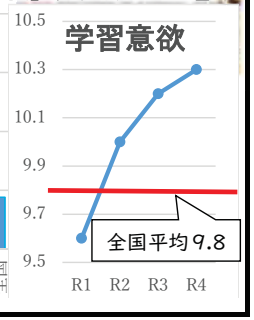
▲見守り隊▲学校支援ボランティア
▲地域学校協働本部･･･組織なし ➡
■見守り隊・学校支援ボランティアの組織化
地域学校協働本部（勝山 SSC）の立ち上げと充実
R5 年度コミュニティスクール設置へ

取組の過程：学校・地域・保護者の信頼関係を築き、学校の負担軽減につなげる。　**変身!!**
学校はすべての人が幸せになるための器　善意の拡散を!!

取組を進める上での困難は「職員のまじめさ（変化への抵抗感）」と「地域・保護者から学校への信頼がない」ことだ。保護者は「強く言えば学校は何でもしてくれる」と勘違いし、職員もまじめさからその要求に応えた。例えば、放課後児童クラブに入ってない子の日常的な「放課後預かり」や「下校の付き添い」である。６年生の滞校時間は８時間 10 分。職員は給食を食べられず、トイレ休憩も取れないほど忙しかったが、使命感だけでしのいでいたのが実情である。こんな超過勤務が常態化している学校にコロナ禍が追い打ちをかける。「放課後の校内消毒」が特に時間を要した。「このままでは職員が倒れる」と考え、「放課後預かり」「下校の付き添い」をやめた。保護者の抵抗は厳しかったが譲らなかった。ただ、急にやめると親も困ると考え、猶予期間を１ヶ月設けた。その間、１～６年生すべてをコロナ対応を理由に毎日５限にし、一斉下校で帰した。同時に、下校見守りを地域や保護者に依頼し、「見守り隊の組織化」を進めた。参観日やＰＴＡ総会など人が集まるすべての行事が中止となり、保護者も職員も先が見通せない不安があった。そこで、PTA 執行部の協力を得て「学校経営説明会」を開催し、「児童の様子」を伝え「保護者への協力要請」を校長が直接依頼した。その際、文科省の通知や法令、児童の実態を表す客観的データを示して理解を得るようにした。全保護者の５分の１の参加だったが、学校状況を包み隠さず示し「善意の拡散」を要請した。保護者からの力強い支持を得られ学校課題解決に向かう大きな１歩となった。その後の PTA 総会、地区懇談会、人権参観日に「学校状況説明会」を開催するのが定例となった。さらに、ICT 活用を推進し、人がすることと PC にさせることの仕分けをした結果、職員のゆとり時間が大幅に増えた。このような取り組みの結果、R２年度までは学校支援ボランティアの登録者は３名だったが、年度末にはボランティア・見守り隊が組織化された。R3 年度は地域学校協働本部（勝山 SSC）を立ち上げ、ボランティアが 73 名になり、23 年ぶりに PTA 地区懇談会が開催された。R4 年度は P 主催「旭川で泳ごう」PTA と共催で「学校へ行こう！」を開催した。信頼関係ができ連携がしやすくなった。

活動の成果：超過勤務が減り教師の本来業務に専念できる
●児童の生活意欲が高まり、知・徳・体すべてに成果
●保護者や地域から信頼されるようになった
●ゆとりができ職員の働きがいにつながった

変新！！

■下校時刻が早まり、勤務時間内に仕事ができる（職員）
■風通しの良い職場になり男性職員が育休取得（職員）

■学校全体がより良い方向に向かっている。100%の信頼を持って勝小に通わせています。（保護者）
■横断歩道を渡った子が脱帽し深々とおじぎをしてくれた。学区外でほめられ私まで鼻が高くなった。（地域）